

「学びの基礎力」を育てる実践を中心に

大阪教育大学教育学部附属平野中学校
野中 拓夫 井寄 芳春 田口 順 小林 弘典 佐藤 由美

はじめに

本校では、新学習指導要領の完全実施を踏まえ、指導と評価の一体化をめざし実践研究を進めている。小学校(附属小学校)や高校(附属高校平野校舎)の教育課程も視野に入れつつ、中学生にふさわしい教育内容や教育方法のあり方を模索し、実践を通して検証している。昨年度は学校の自己診断を取り入れ、保護者、生徒、教員に対してアンケートを実施するとともに、その結果を踏まえつつ、本校としての教育課題を明らかにし、学校改革プランを構想しているところである。ただし、改革を進めていくにあたって、その根拠となる事実、データはできるだけ多角的に収集し、客観的に分析、解釈することが求められる。今回、「総合学力研究会」の「学力向上のための基本調査」(以下、基本調査)は、このような考えから受検したものである。本校としての教育改革に資するデータの1つとして位置づけるとともに、得られたデータから本校の教育実践を見直し、修正するために活用しようと考えた。結論としては、本校の教員が考えていたよりも、厳しい内容の結果が示された。ただし、1つひとつのデータ結果に一喜一憂せず、教師の実感とも付き合わせながら、今後の教育課程を改善する際の指針として活用していきたいと考える。

I 基本調査を踏まえて

「学びの基礎力」は「豊かな基礎体験」をベースに、「学びに向かう力」「自ら学ぶ力」「学びを律する力」の3つの力が相互に作用し合い、形成されていくものと捉えられている。

まず結果全体を概観すると、多くの項目で調査仮説の妥当性が裏付けられていることが分かる。「学びの基礎力と教科学力」や「学びの基礎力と生きる力」の間には、正の相関が見られる。「確かな学力」は「学びの基礎力」に支えられながら、定着していくことに改めて気づかされる。

さて、我に返って自校の結果に目を落とす。通常この手の調査結果というものは、日頃、我々教師が感覚として感じ取っていたことを、数値という、目に見える残酷な形のデータとして、眼前に突きつける。そして、多くの場合、我々は、我が子の成績表を見つめる保護者と同じ態度で、その客観化された数値を食い入るように見つめる。つまり、全体の平均スコアをどの程度下回ったか、

必死の形相でチェックしてしまうのである。(人間の性であろうか、やはり最初に目が行くのは、マイナスの側面なのである。)

しかし、大事なものはそれからである。我々は教育改善のために、調査を実施したのであり、決して興味本位で受検したのではないはずである。低い評価を示した項目については、直ちにそれを挽回するための手だてを講じなければならない。また、高い評価を示した項目については、今までの実践のどの部分が有効に働いたかを検証し、さらに力を伸ばせるよう、改良の手を加えるべきである。そのように考えることこそが、「学力向上のための基本調査」を受ける意義であろう。あくまでも、自校のカリキュラム診断の1つとして、活用することを前提として捉える姿勢を持ちたい。

次項では、本校が、この基本調査の結果を見て、どのように本校のカリキュラムを診断したか、実践例を通して述べていくことにする。

Ⅱ 診断結果の分析と「学びの基礎力」を育てる実践例

本校（2年生・平成14年度）の調査結果に関して、特に、着目したのが、第一に「比較的高い評価が得られた項目」の1つの「豊かな基礎体験」である。第二に、「比較的评价が低かった項目」の中の「学びに向かう力」と「自己成長力」である。

① 比較的高い評価が得られた項目 — 「豊かな基礎体験」

「学びの基礎力」の中で、特に高いポイントを示したのは「豊かな基礎体験」の項目である。特に「直接体験」と「メディア体験」の2つの項目は高い評価ポイントを示している。これらの項目は「学校の活動以外」の調査であり、生徒の自律的な学習の成否が問われる項目といえよう。本校の生徒は、「自然体験」「文化体験」「対人体験」が比較的豊富で、新聞や書籍、インターネット等を通して主体的に情報検索を行っている様子が見えてくる。

確かに「豊かな基礎体験」の調査項目の多くは家庭教育に関連するものであり、本校の教育成果として語りえないものである。しかし、このような体験が「確かな学力」として生徒一人ひとりに根付き、体験の質を高めていくための方法が確立していないと単なる「遊び」「思い出」に終わってしまう。家庭での体験と学校での学習を結びつけ、「自ら体験しよう」という意欲を育て、継続して探究しようとする態度を育てることは学校の重要な役割といえよう。学校内での意図的・計画的な学びと学校外での多彩で偶発的な学びの双方を重視しつつ、何からでも、どこからでも、誰からでも学ぼうとする能力や意志を養っていききたいと考える。そのためにも学習スキルを育成することは極めて重要である。本校生徒の「強み」をさらに発展させつつ「豊かな基礎体験」を「確かな学力」へと向上させていくための手立てを開発していきたいと考える。

(1) 総合的学習「STEP（ステップ）情報」とは

現在、本校では、3種類の総合的学習を実施している。従来から実践研究を進めている「JOIN」と、平成14年度より創出した「STEP」「卒業研究」である。

すべてが問題解決能力や問題発見能力等を育んでいくものであるが、アプローチの仕方やカリキュラムを構成するためのベースが異なる。「JOIN」では個人の興味・関心を社会的な課題につなげ、社会的実践力を培っていくのに対し、「STEP」や「卒業研究」では、教科のクロスカリキュラムを軸に、多様な学習スキルや学習能力、意思決定能力を養う。

STEPはさらに「STEP情報（1年生・週2時間）」「STEP国際（1年生・週1時間）」「STEP健康（2年生・週1時間）」の3つに分かれる。STEP国際とSTEP健康は全く新たな総合的学習であるが、STEP情報は、平成14年度よりJOINから分離し、リニューアルしたものである（以前は「JOIN I群」と称していた）。STEP情報は、単にJOINの基礎固めをする場ではなく、すべての学びの基礎となる学習スキルを育成することを目的としている。

また、この学習は学習スキルの中核となる情報活用能力に習熟するとともに、地域を舞台にした多様な基礎体験やメディア体験を基盤にカリキュラムを構成している。野外や日常的なメディアと学校とをリンクさせたこのような学習の機会を設定することにより、「豊かな基礎体験」が「学びに向かう力」「自ら学ぶ力」「学びを律する力」、さらには「教科学力」「生きる力」へと高まっていくと考える。

(2) STEP情報の概要

STEP情報では、育成すべき情報活用能力として「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度（情報モラルを含む）」の3つの柱をベースとしている。特に「情報活

用の実践力」「情報社会に参画する態度(情報モラルを含む)」に焦点化している。整理すると以下ようになる。

- 情報活用の実践力…
情報収集力・情報判断力・情報処理力・
情報創造力・情報発信力・情報伝達力・
表現力 等
- 情報社会に参画する態度…
情報批判力・情報モラル・マナー 等

(3) STEP情報のカリキュラム

STEP情報のカリキュラムは、1年を通して、上記のような情報活用能力がまんべんなく育つことを前提に考えた。ただし、知識やスキルの獲得だけが目的にならないよう、次の点に注意して編成している。

- 学習の成果を実際の場で試す機会をタイム

リーに設定し、学びが生きてはたらくことを体感できるようにする。

- 学びが実生活と乖離しないよう、本物に触れるようにする。
- 生徒自らが地域社会に対して貢献し、それを実感できるようにする。
- 自己評価や相互評価、他者(地域の方々)評価等を組み込むことを通して、主体的な学習の構えや意欲を高めるようにする。
- テーマを決めて新聞記事を収集させることを通して、現代的な諸課題に対する関心を高めさせる。

特に、このような点に留意してカリキュラムを編成・実施していることと、調査結果において「豊かな基礎体験(直接体験・メディア体験)」が高い評価結果を得たことが、深く関係していると考えられる。STEP情報のカリキュラムは以下の通りである。

■STEP情報のカリキュラム

回数	時間	1組	2組	3組	総時間数
第1回	1	オリエンテーション			1
	1	意味調べ			2
第2回	1	インタビュー①	聞き書き①	カメラ講座(人物)	3
	1	カメラ講座(人物)	インタビュー①	聞き書き①	4
第3回	1	聞き書き①	カメラ講座(人物)	インタビュー①	5
	1	聞き書き②			6
第4回	1	インタビュー②			7
	1	インタビュー③			8
第5回	2	平野平野めぐり(インタビュー実践)			9・10
第6回	2	プロの技を盗もう(テレビディレクターの講演)			11・12
第7回	1	平野30景 行く先決定			13
第8回	1	カメラ講座(風景)	インタビューのまとめ方		14
	1	インタビューのまとめ方	カメラ講座(風景)		15
第9回	1	平野30景 取材方針の決定			16
	1	平野30景 取材準備・リハーサル			17
第10回	終日	平野30景 取材			18～23
第11回	2	平野30景 まとめ			24・25

情報
収
集
ス
キ
ル
I

第 12 回	1	インターネット検索	新聞・書籍の使い方	アンケートの作り方	情報	26
	1		アンケートの作り方	新聞・書籍の使い方		27
第 13 回	1	新聞・書籍の使い方	インターネット検索	JOINサーフィン 「ボランティア」	報	28
	1	アンケートの作り方				29
第 14 回	2	JOIN サーフィン 「ボランティア」		インターネット検索	集	30・31
第 15 回	2	情報収集の達人：ソースの効果的な選び方				32・33
第 16 回	2	映像の読み解き：(テレビプロデューサーの講演)			ス	34・35
第 17 回	1	図表統計とレイアウト	パワーポイント	OHP/OHC	キ	36
	1			著作権		37
第 18 回	1	パワーポイント	OHP/OHC	図表統計とレイアウト	ル	38
	1		著作権			39
第 19 回	1	OHP/OHC	図表統計とレイアウト	パワーポイント	II	40
	1	著作権				41
第 20 回	1	JOINサーフィン 「国際理解・国際文化」「環境・自然」「福祉」			課	42
	1	「健康・生命」「人権・平和・社会問題」の中から1コース選択				43
第 21 回	1	JOINサーフィン 「国際理解・国際文化」「環境・自然」「福祉」			題	44
	1	「健康・生命」「人権・平和・社会問題」の中から1コース選択				45
第 22 回	2	ブチ JOIN (課題設定)			定	46・47
第 23 回	2	ウェビング・分担決定				48・49
第 24・25回	4	ブチ JOIN (調べ)			ま	50～53
第 26～28回	6	ブチ JOIN (まとめ)				54～59
第 29・30回	4	ブチ JOIN (発表会)			と	60～63
第 31 回	2	STEP 情報のまとめ				64・65
第 32 回	終日	課題設定準備 (JOIN見学会)			め	66～70

* STEP 情報は、週 1 回、今年度は月曜日の 5・6 限に行っている。

* 第 10 回の活動は、全学年、総合的学習の日 (JOINDAY) として、終日、学校を離れて活動することができるように設定した日を利用して行っている。

* 第 32 回の活動は、1・2 年生を対象に、校外の施設などに出向き、体験や見学を行うための日 (JOIN見学会) として設定している。

* 「情報収集スキル I」は、1 次情報の体験的な習得の場である。「情報収集スキル II」は 2 次情報の習得とプレゼンテーションスキルを形成する場である。

(4) STEP 情報の実践

前述のカリキュラムにあるように、できるだけ「直接体験」や「メディア体験」をちりばめるよう意図している。地域 (平野) にインタビューに出かけたり、校外の施設 (博物館などの各種公共施設や企業) に出向いて見学・体験したり、専門家の方の話を聞いたり、直接、本物と向き合うことを重視している。またインタビュー

や聞き書きの仕方、写真の撮り方を学習した後、すぐに取材に出かけるというように、学習したスキルを積極的に使えるように配慮し、学習の成果が実感できるように、「学習の役立ち感」(これは「学びの基礎力」の「学びに向かう力」の範疇に含まれる) を意識した流れになっている。

具体的には、1 学期 (第 1 回～第 11 回に相当) のカリキュラムは 1 次情報の収集に目標をおき、

第1回～第4回までに学んだことを第5回に直接体験によって試し、第6回でプロ(本物)の方から指導を仰ぎ、第7回～第9回で反省点の改良、そして更に新しいスキルを学び、第10回で再び直接体験をしてまとめるという流れである。基本的スキルの学習と直接体験・本物体験を短い間隔で繰り返すことによって、学びの成果が生きて働くものとなる。また、直接体験・本物体験が、確かな学びを裏付けるものとなるような仕組みである。

2学期前半(第12回～第19回)は、「メディア体験」の目白押しである。これもまた、1学期と同じように、基本的スキルを学習(第12回～第14回)した後、それらを試す機会(第15回「情報収集の達人」……特定の課題を与え、それを解決するための情報を得るには、どのようなメディアが最適かを体験する)を設け、また基本的スキルの獲得(第17回～第19回)へと戻る。

2学期後半から3学期(第20回～第32回)にかけては、2年生から始まる課題探究型の総合的学習「JOIN」へのスムーズな橋渡しも兼ねて、ショートレンジの課題探究学習「プチJOIN」が学習の中心になる。これもいきなり課題探究を始めるのではなく、その前に、直接体験を取り入れた教師主導型の課題探究学習(本校では「JOINサーフィン」と称している)を導入として実施、学習動機を高める。そして、本番のプチJOINでは、まさに1年間の総決算として、今までに学んだことをフルに発揮しながら活動を進めることになる。



学んだスキルを生かして取材しよう!

(5) STEP情報の成果

1年間の学習を終えての生徒の代表的な感想は、次のようなものであった。

- ・STEPの学習をして、インターネットの調べ方や発表のしかたなど、いろいろなことが分かってよかった。JOINでもがんばりたい。
- ・普通の教科とはひと味違う授業だったので、おもしろく、勉強になりました。2年生にするJOINでは、今よりも何倍もよい結果が出るようにがんばりたい。
- ・実戦に向けて役に立つことをいろいろ教えてくれたのでよかった。
- ・普通に学校で習う教科の勉強だけでなく、日常に使える学習だと思う。
- ・普通の授業とはまた違っていて、新鮮だった。「いろいろやったなあー」という思いがあった。
- ・最初のほうは、なぜこんな事をしているのかと、とても不思議だったけど、いざ終えてみると、とても役に立ったのでよかったと思いました。
- ・小学校ではできなかったことができた。総合的学習が得意になった。

これらの感想を見る限り、生徒たちにも概ね好評のようであった。また、「直接体験」・「メディア体験」をふんだんにカリキュラムの中に盛り込むことによって、生徒たちの日常生活の中に、ごく自然に、直接・本物・メディアというものを取り込んでいったのではなかろうか。それが「豊かな基礎体験」となって、「学びの基礎力」を下支えする力となっていると思っている。

また、今回は結果として表れなかったのだが、生徒たちの感想の中に「学習の役立ち感」や「学力向上心」に言及したものが多く見られることも、今後「学びに向かう力」の成長に貢献するものと期待が持てる。



目的に応じて適したメディアを選ぼう！

② 比較的評価が低かった項目

— 「学びに向かう力」・「自己成長力」

本校が「学びの基礎力」や「生きる力」の中で全体の平均を下回ったもののうち、本校の課題として深刻に受け止めたのは、「学びに向かう力」や「自己成長力」である。

まず、「学びに向かう力」の内容項目は、「1. 感じ取る力」「2. 学習動機」「3. 自己効力感」「4. 自己責任」となっている。この中でも特に「2. 学習動機」が相対的に低いことが判明した。設問としては「勉強して身に付けた知識はいずれ仕事や生活の中で役に立つと思う」「勉強して何かがわかるようになっていくことはうれしい」「勉強して、もっと力や自信をつけたいと思う」である。この項目の評価が低いということは、すなわち、勉強の本当の楽しさも分からず、ただ漫然と、やれと言われたことをこなすだけの学習を展開していると感じている生徒が少なくないということである。

この状況を改善するためには、入学段階の時期から教科本来の楽しさを生徒に伝え、味わってもらう機会が必要であると考えた。1年生対象の選択教科「インパクトセミナー」は、こうした経緯で平成15年度から開講したものである。

また、「自己成長力」の内容項目は、「1. 成長動機」「2. 自己コントロール力」「3. 自己評価力」「4. 自信・自尊感情」「5. 自己実現力」「6. 進路決定力」である。本校生徒は、「1. 成長動機」や「5. 自己実現力」は高い値を示しているものの、「2. 自己コントロール力」「4. 自信・自尊感情」が弱いことに気づく。後の2つの項目は、中学生全体にもいえることであ

るが、本校としての独自の取り組みが要請される。

「2. 自己コントロール力」を促し、「4. 自信・自尊感情」を高めるためには、教科の学習だけでは難しい。道徳や特別活動の時間も有効な場合もあるが、それらには固有の目標・内容が確定されており、その目標を達成することが期待されるからである。

一方で、総合的学習は学習指導要領においても内容が示されているわけでもなく、教科書もない。評価も学校独自の観点や規準を設けることができる。生徒の「生きる力」に直接結びついたカリキュラムを構想し、実践することができる領域である。

今回、2年生の総合的学習に、新たに「STEP健康(ライフスキル)・週1時間」を導入したのはこのような考えからである。以下、「インパクトセミナー」と「STEP健康(ライフスキル)」に関しての実践例を掲載する。

(1) インパクトセミナー

— 「学びに向かう力」を高める

① インパクトセミナーの目的と概要

インパクトセミナーは、1年生で実施する選択教科である。この授業の目的は以下の三点である。

- A. 教科の楽しさや魅力、あるいは本質や価値が伝わるように授業を行うことを通して、苦手な教科、好きになれない教科を克服できるようにする。
- B. 2年生から本格的に始まる選択教科に備えて、教科の目標・内容を踏まえ、自分にあった選択ができるような構えを形成する。
- C. 教科の学び方を学ぶことを通して、今までの学習の仕方を振り返り、中学生らしい学びのスタイルを確立する。

インパクトセミナーは、前期(7月)に2時間ずつ3回(計6時間)、後期(2月)に2時間ずつ3回(計6時間)実施する。前期に開講した講座は、国語・社会・数学・理科・美術・技術家庭・英語の7教科である。講座のテーマは以下の通りである。

② 講座の実際

以下、インパクトセミナーの中の「社会」「数学」「理科」を例に、ア. 目的、イ. 内容、ウ. 考察、の三点について述べていくことにする。

■インパクトセミナー講座のテーマ

教科	講座名	目標
国語 (高校教官担当)	ディスカッションをしよう	コンピュータなどを活用したディスカッションを通して、他人と違う意見を持つ大切さ、人と違う意見を述べる勇氣、違う意見に対する寛容さを持つ。
社会	ひろげよう！マップワールド —地図からみえる世の中とわたし—	地図の世界の豊かさ、地図の大切さを理解するとともに、地図を読む力を身につける。
数学	6時間だけでも数学の頭になろう！	数学的思考の習慣を養う。
理科	To be & ミクロを見まろう	スケールの大きな実験・観察を、自分が納得するまで行うことを通して、体験的に自然現象を理解することの大切さを学ぶ。
美術	オリジナルTシャツを作ろう！	○伝統的な型染め技法を体験することにより、染色（工芸）を身近に感じる。 ○技法の特色を生かし、自分らしさも表現できるデザインを考える。
技術家庭	飯を炊く —あなたはごはんを炊くことができますか？ 屋外で！—	簡易携帯かまどの製作を通して、ものづくりに対する興味・関心を高める。
英語	映像を見ながら英語を楽しもう！	できるだけ大きな声で文字（つづり）にとらわれずに話すことができるようにする。

A. 社会

【ア. 目的】

地図は事象を空間的に表現したものであり、人類が誕生したところから地図は作られ、現在も世界中のありとあらゆる地域や場所で地図は作られている。

ところが地図を使った学習や地図記号を暗記する授業はあるが、地図に慣れ親しんだり、地図そのものを学習したりする機会はほとんどない。今回のインパクトセミナーでは、地図の世界の豊かさ、地図の大切さを理解させるとともに、地図を読むこと、地図から何かを発見すること、地図から考えることの楽しさを経験させる。このことを通して、地理的分野、社会科を好きにさせるきっかけにさせたいと考える。

【イ. 内容】

回	テーマ	内容のあらまし
1	地図の愉しみ —地図をながめて—	さまざまな地図と出会い、地図の世界の豊かさを実感する。 ○こんなにあるの？ これも地図？ ○わたしの頭の中にも地図が…!!
2	地図から送られるメッセージ —地図をみつめて—	地図ならではの表現のしかたや地図をみる際の約束事を学ぶ。 ○地図で何かが伝わる・何かを伝える！ ○広告地図のワナ？
3	地図づくりに命を賭ける人々	地図制作に賭ける人々の想いにふれる。 ○放送番組（プロジェクトX）の視聴

a. 地図の愉しみ — 地図をながめて —

- 地図がなぜ必要なのか、地図はどういうところに使われているかについて発表する。
- 鑑賞した地図の中から興味を持ったものを1つ選び、どういう点に興味を持ったかについてコメントを書く。(鳥瞰図、観光地図、海外の地図、広告地図等、多種多様な地図を机の上に並べておき、自由に閲覧できるようにしておく。)
- GIS (地理情報システム) の役割についてもふれる。
- 普通教室の地図(「クラスルームマップ」)をできるだけ詳しく描いてみる。

b. 地図から送られるメッセージ — 地図をみつめて —

- 教室地図の相互鑑賞・感想
- 広告地図を見て、「①単純化」「②誇張」「③選択」の3つの観点で評価する。
- 広告地図がアピールしているもの、どういう点で成功しているかを考えさせる。
- 学校付近の広告地図を制作する。

c. 地図づくりに命を賭ける人々

- 広告地図の相互鑑賞・感想
- 放送番組の視聴(プロジェクトX「地図のない国 執念の測量1500日」〈第110回 4月8日放送〉)
- 感想を書く

【ウ. 考察】

[学習後の生徒の感想]

- ・ 地図の鑑賞などを通して、地図のことが少しずつわかってきたところでプロジェクトXの視聴をしたのでわかりやすかったです。いつも、何気なく見ていた地図も、こんなに苦労して作っているんだなぁと思いました。今まで全く興味がなかった地図にも少し関心が出てきたような気がします。私は社会が一番苦手だけど、これから少しずつがんばっていきたいです。3時間だけだったけど楽しかったです。(後略)〈I女〉
- ・ めっちゃ楽しかった。こんなに楽しい社会の授業はなかった。地図について今まで全然興味なかったけれど、この授業で地理が大好きになりました。地図をかいてみたり、地図制作の様子をビデオで見たりしてすごく感動しました。(後略)〈T女〉

インパクトセミナーを通して、どこまで「学習動機」を高めることができたかについての検討は不十分であるが、授業後の感想を見る限りにおいて、概ね、関心が高まってきている様子がうかがえる。

「学びに向かう力」を高めるためには、その前提として、学ぶことの意味を実感する機会を設定することが肝要である。そのためにも、教師の得意分野を軸に、教科の楽しさや価値に触れることができるような題材を豊富に準備し、生徒に提供することが求められる。

B. 数 学

【ア. 目的】

数学は合っているか、間違っているか。「○」か「×」かなど、結果だけだと思っている生徒も多いかもしれない。しかし、結果よりも考え方こそが大切なのである。数学が「嫌い」、「苦手」と思っている生徒が、少しでも数学は「面白いな」、「楽しいな」、「わかる」と思い、少しでも数学が好きになるよう

にと思い、この課題を設定した。

【イ. 内容】

回	テーマ	内容のあらまし
1	トランプの手品の種を明かそう	数学的に考えることによって、なぜトランプを当てることができるのか？ グループで考え話し合い、種を明かした。
2	一筆書き	一筆書きの決まりを見つけ、一筆書きができる図形、できない図形について考えた。
	長方形の面積の二等分	長方形の面積を二等分するには対角線の交点を通る直線を引けばいいことを考え、大きい長方形から小さい長方形を切り取った図形についても考えた。
3	試合数	トーナメントの試合数を考え、そこから $1+2+2^2+2^3+\dots$ の問題を解く方法を考えた。
	最短距離を見つけよう	2点間の最短距離は、2点を結ぶ線分の長さということを利用して、直線の同じ側にある2点について、1点を出発し、直線に触れてもう1点に行く最短距離を求めるなどの問題を解く方法を考えた。
	友達の作った問題を解こう	本で調べたりして、自分たちが作ってきた問題をみんなに配り、お互いに解き合った。

【ウ. 考察】

3回の授業を通して、初めは難しかった問題も、理解した生徒がグループの友達に教える、または、説明を聞いて理解し、次の問題に応用して解くなどの姿が見られた。友達に教えた生徒は、教えることによって自信をつけ、初めは分からなかった生徒は、問題を少しずつ応用することによって理解し、自信をつけていった。また、「友達の作った問題を解こう」では、自分の作った問題を友達に解いてもらうことにより、数学の楽しさを感じているようであった。講座を終えた生徒たちの感想は次の通りである。

- ・物を使って数学をやると、少し楽しかったです。3時間目が少し難しかったけれど、見つけ方は分かったのでよかったです。これからも、見つけ方とかが分かれば、楽しいかな？って思っています。
- ・とっても面白かったです。ちょっと難しかったです。解法が分かると面白いです。数学は、特に好きというわけではないけれど、楽しんでできました。
- ・数学が苦手だから、頭が痛くなってしまいました。でも楽しくできてよかったです。
- ・6時間、すごく楽しかったです。大キライな数学と、少し友達になれた気が……。考え方のコツもつかめたり、少しだけ自信もつきました。今度から、数学がんばるぞ〜!!

C. 理 科

【ア. 目的】

理科とは、私たちの身のまわりにある自然現象をより深く理解し、科学的な見方や考え方を養うための学習である。そこには、実験、観察などを行いながら、データ化したり、モデル化したりしながら総合的に考察し自分の考えで表現することが要求されている。しかし本校に入学した1年生の中には、理科とは、暗記教科であると考えている生徒もいる。そこで、本講座では、物づくりを主体に置き、『学ぶ』というよりも五感を使って体験し、理科の楽しさを感じ取るというスタンスで講座を設定した。

【イ. 内容】

回	テーマ	内容のあらまし
1	手作り熱気球 べっこう飴	身近な材料を使って、熱気球の製作、打ち上げ。 べっこう飴をつくり試食。
2・3	ペットボトルロケット	ペットボトルを使って、ロケットの製作、打ち上げ。

「手作り熱気球」では、『暖かい空気は冷たい空気より軽い』という原理をおさえた上で、2人一組で作らせた。気球にあたるゴミ袋が燃えたり、気球と燃料の部分とをつなぐエナメル線とのバランスが悪かったりと、すぐには上げることが出来なかった。しかし、グループで相談したり、他のグループからのアドバイスを聞いたりしながら改善を行い、1つのグループが成功すると、生徒たちから歓声があがり、他のグループから「私たちも上げよう」「上げたグループよりもよいものをつくろう」という競争心が芽生え、最終的にほぼ全員のグループが上げることができた。

「べっこう飴」は、メスシリンダーやガスバーナーなどの使い方を学びながら製作した。生徒たちは、ガスバーナーの使い方など思い出しながら前向きに取り組んだ。実験後の感想で、なぜ、元の状態(砂糖)にならずに飴になったのか疑問を持った生徒が何人か現れた。



遠くへ飛ぶかな？ ペットボトルロケットの制作

「ペットボトルロケット」では、遠くに飛ばすことを目的に製作した。製作前に教師から作り方と完成品を示し、製作しやすいようにした。製作に1日(2時間)、打ち上げに1日(2時間)を費やした。打ち上げは、運動場で行い、思い思いの割合で水と空気を入れて行った。初めはあまり飛ばなかったものの、ロケットの重さと発射する力とのバランスを考え、水と空気の割合を変えたり、羽をつけて安定させたり、先端を尖らせて空気抵抗を小さくしたりするなど、試行錯誤しながら、より遠くへ飛ぶよう改善していった。

【ウ. 考察】

講座終了後にアンケート(30人)を行った。もともと理科は、好きか苦手かにおいては、受講生の5割以上の生徒は「理科が好き」であった。インパクトセミナーの主旨は「どちらかというと苦手、嫌い」「好きになりたい」という観点から選択するように指導していたが、しっかり理解できていない生徒もいたようである。

今回の授業に関しては、9割以上の生徒が満足するという結果を得た。良かった理由としては、「今まで体験できなかったことができた」や「熱気球やロケットをうまく飛ばすことができた」などがあげられる。また、「いまいち」であった理由としては、熱気球やペットボトルロケットをうまく作ることができなかった事があげられていた。このことから、未知の体験であり、試行錯誤しながら達成感を感じることができ教材が生徒たちに有効であると考えられる。

③インパクトセミナーの展望

インパクトセミナーを終えて生徒全員(中1)にアンケートを実施した(回答116名)。「苦手、嫌いなどの観点から教科を選択したか」という問いに対し、91名の生徒が「はい」と答え、20名の生徒が「いいえ」と答えている(無回答5名)。「選択した教科が好きになれたような気がする」の項目では、「強く思う」：45名、「思う」：54名、「思わない」：12名、「全く思わない」：5名であった。また、「教科の魅力が伝わってきた」という項目に対しては、「強く思う」：49名、「思う」：53名、「思わない」：12名、「全く思わない」：2名であった。

概ね、生徒にとって各講座内容が好意的に受け止められた印象を受ける。「学習動機」を底上げし、「学びに向かう力」を高める目的で始めたインパクトセミナーの成果としてある程度の手応えがあったのではないかと感じている。

わずか3回(2時間連続)の講座であるが、各教師の得意技を発揮しつつ、教科が好きになる「ツボ」を押さえることによって、改めて教科を学ぶ意味を感じ取らせることができたと考える。大切なことは、このような特別のセミナーだけでなく、普段の授業の中でも、折にふれて教科の魅力や値打ちについて語る機会を持つことではないだろうか。生徒は、「学ぶ意味を知りたがっている」存在であるといえよう。

インパクトセミナーは、後期の実践と合わせて年度末に総括し、改めるべき点を洗い出し、よりよいカリキュラムへと修正していきたい。

(2) STEP健康(ライフスキル)

——「自己成長力」を高める

①STEP健康の目的と概要

「自己成長力」は、「問題解決力」や「社会的実践力」、「豊かな心」の基盤ともなる重要な力である。

中学生の時期は一般に思春期にあたり、身体的、精神的な成長に大きな変化がみられる時期である。このような時期にこれまでの生活経験を振り返り、「自分自身を深く知ろうとすること」や「身体を健やかに、伸びやかにしようとする事」、あるいは「他の人と良好な人間関係を築くことができるようにすること」などの「ライフスキル」を身に付けることができれば、自己成長力を高めるきっかけになるのではないだろうか。

ここでいうライフスキルとは「3つのライフ(生活・生命・人生)の質を高める」という目的を達成させるために、日常生活で生じる様々な問題を解決できる有効な技能のことである。

平成14年度より、総合的学習を再編するにあたり、「STEP健康」を創出したのは以上のような理由からである。具体的な目標としては以下の通りである。

- A. 日常生活を振り返り、様々な角度から自分自身をモニターする中で、今後とも必要になるであろうと思われる生活技術を身に付け、積極的に活用できるようにする。
- B. 生命の尊さなどについて学習することにより、自分自身だけでなく他者も含めてお互いのことを大切にできる精神を養えるようにする。
- C. 生涯を通じて、自らの健康を適切に管理し、改善していける資質や能力の基礎を培い、実践力を育成することをめざす。また、他者とのコミュニケーションを交えながら、よりよい人間関係を築くことのできる能力を身に付けさせる。

②STEP健康の計画

担当する教科は、保健体育、家庭科である。また養護教諭もプラン作りから参加し、授業も担当する。

STEP健康(ライフスキル)のカリキュラムは以下の通りである。

■STEP健康(ライフスキル)のカリキュラム

時間数	担当教科・教諭	おもな内容
3	保体	私の身体に気づく。他人の身体に気づく。「私の健やかポートフォリオ」に記録していく。
3	家庭	私の生命と誕生と生い立ちについて、家族の人から聞いたことをもとに自分史を作り、他の人と交流する。
3	保体	ジェンダーバイアスについて考える。スポーツとジェンダーについて。
3	養護教諭	自分の体と健康を守るため「リラクゼーション」について学ぶ。
3	保体・家庭・養護	ソーシャルスキルトレーニング(自分を表現する「技」)を学ぶ。
4	家庭	健康な体をつくるために、自分の食生活を一定期間モニターし、栄養の偏りがなくどうか調べ、改善する。
4	保体・家庭	私と身の回りの環境を整える。(健康と環境は「清掃」と「整理」から、ということを実感する。)
3	養護	身体と表情で感情を表現する。ストレスマネジメントについて学ぶ。
3	保体・養護	ヘルスプロモーション(薬物やたばこ、飲酒などが身体に及ぼす影響)について考える。
3	保体・家庭・養護	自分の気持ちを上手に伝える。(他人の気持ちを傷つけない表現方法について学ぶ。)
3	保体	支えあう身体、響きあう身体。身体をほぐしあう。

※保体：保健体育 家庭：家庭科 養護：養護教諭

以上のプランは現在実施しているところであり、カリキュラム評価はまだ終わっていないが、このような学習の機会を設定することを通して、

自分をコントロールし、自己や他者を肯定的に受容していこうとする意志や態度が涵養されるものと推察する。

おわりに

現在、本校では「人とともに豊かな心をはぐくみ、主体的に学ぶことができる生徒」の育成に向けて教育課程の改善に取り組んでいる。特に重視していることは、教科、道徳、総合的学習等の関連を生かしつつ、学びと育ちを一体化していくことである。しかし、本校の教育環境や教育課程が生徒や保護者にとってどのように映っているのかという全体的な調査がなく、教師の印象や主観に負う所が多かった。

このような観点からも、今回、基本調査のデータからは大きな示唆をいただいた。教師が見ている生徒像と生徒自身が感じている自己像が大きく乖離している項目も多く、正直なところとまどいの方が多かった。しかし、1つひとつの設問項目の結果を教師が対話しながら解釈することにより、生徒理解を深め、自校の教育改革に対する意識を高める契機となったと考える。

今後、小学校(附属平野小)とも連携しながら基本調査を継続し、課題点を精選しつつ、解決のための方法を具体的に策定し、着実に努力を重ねていけば、より確かな学校改革につながっていくのではないかと推察する。